

第1章 出雲市の概況と歴史文化の特徴

第1節 出雲市の概況

1 位置及び交通条件

出雲市は、島根県の東部、^{しんじこ}宍道湖の西側に位置し、北部は『出雲国風土記』の国引き神話で知られる島根半島、中央部は出雲平野、南部は中国山地で構成されています。市域は東西約30km、南北約39kmの範囲に広がり、東は松江市、西は大田市、南は雲南市・飯南町に接し、面積は624.36km²となっています。

道路は、本市の中央部を東西に横断する国道9号を軸に、出雲、大社、平田地域を結ぶ国道431号、南部の山間地域を結ぶ国道184号などが通り、それらが道路網の骨格となっています。

また、国道9号と並行する山陰自動車道は、現在、西は出雲ICまで開通し、宍道JCTからは松江自動車道が南方面に伸び、中国自動車道、尾道自動車道と接続しています。

広域的な公共交通機関も比較的整っています。宍道湖西岸にある出雲縁結び空港からは、東京(羽田)や大阪(伊丹)、名古屋(小牧)、福岡、隠岐への国内線が運航しています。鉄道はJR山陰本線が東西に伸び、宍道湖の北側には松江市と出雲市(出雲市駅、出雲大社前駅)をつなぐ^{いちばた}一畑電車が通っています。このほか主要都市へ直行する高速バスもあります。

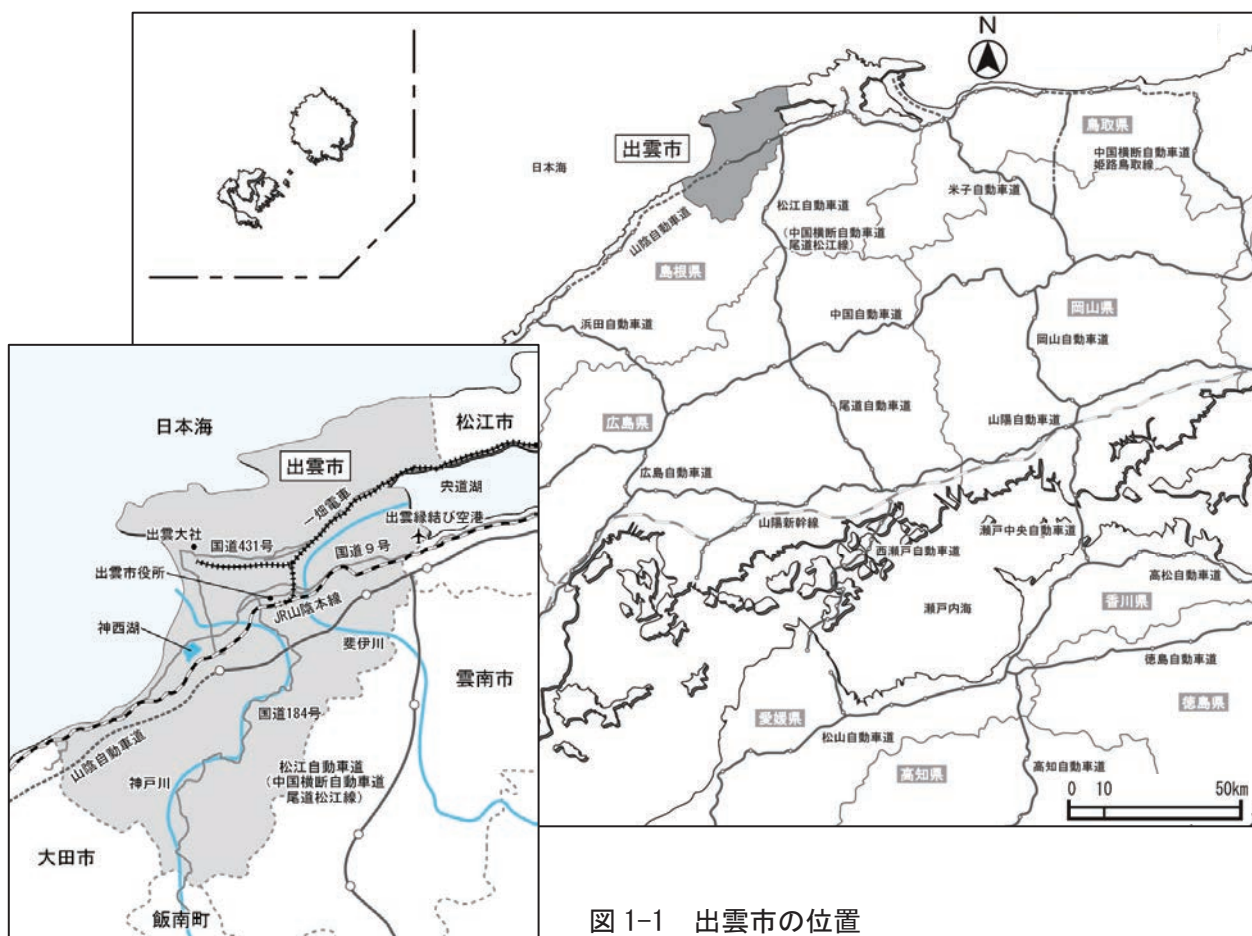


図1-1 出雲市の位置

2 自然的条件

(1) 地形

ア 出雲平野の形成

出雲市の歴史は出雲平野の成り立ちと密接に関わっており、地形の形成については、古くは『出雲国風土記』の「国引き神話」でも語られています。現在の出雲市は、北の島根半島と南の中国山地の間に平野が広がり、中国山地から平野に流れ出た斐伊川と神戸川がそれぞれ宍道湖と日本海に注ぎ込む地勢です。

●三瓶山の噴火と沖積作用

出雲平野の形成が進むきっかけとなったのは、約 4000 年前(縄文時代後期)の三瓶山の噴火です。約 6000 年前(縄文時代前期)までは、古宍道湾が島根半島と中国山地を分断しており出雲平野は存在していませんでしたが、この噴火で供給された多量の土砂が神戸川によって運ばれ、次第にこの湾を埋めていきました。約 2000 年前(弥生時代)にこの三角州は島根半島まで達し、今の出雲平野の原形が出来たと考えられています。平野の西側にはまだ大きな水域が広がっていました。奈良時代に「神門水海」と呼ばれたこの水域は、その後の沖積作用によって規模を縮小し、今では神西湖としてその名残をとどめています。

●斐伊川東流による平野の拡大

いま一つ平野形成において注目される事象として、斐伊川の東流が挙げられます。かつては平野で東西両流し、東は宍道湖、西は「神門水海」に注いでいた斐伊川は、中世末から近世初頭ごろ完全に東流するようになります。そして、江戸時代には上流で盛んに行われた「鉄穴流し」によって多量の砂が下流に運ばれるようになり、宍道湖西岸ではこの砂を利用した「川違え」により新田開発が進められました。

●地理的な特徴

このように、火山と人的開発の二つの要因によって急速に平野が拡大した時期があることは、全国の海岸平野と比べても特異な例です。

また、中国山地北縁、それに並行して延びる島根半島、そしてその間に広がる出雲平野、この三者が呈する地勢は国内ではかなり特殊です。

さらに、日本海を隔てて朝鮮半島や大陸と対面し、沖では対馬海流とリマン海流が行き交う場所に位置しています。こうした地理的条件を背景に、出雲平野周辺には古代から近世に至るまで、各方面からさまざまな文化が流入しました。出雲市は、それらを受容し独自に展開させてきた地域といえます。

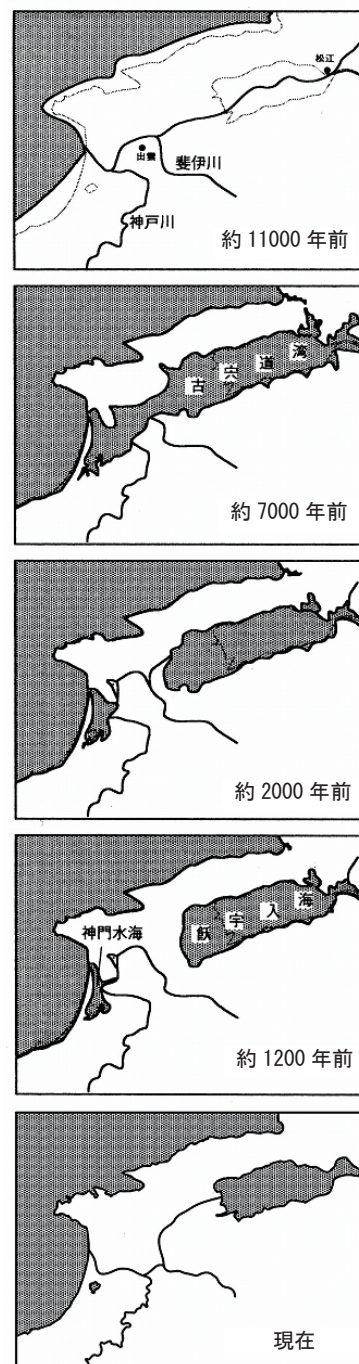


図 1-2 出雲平野の形成過程
中村唯史「島根県東部の地形変遷」
『湖陵町誌』2000 を一部改変

イ 地形の特性

出雲平野は、中国山地に源を発する斐伊川と神戸川により形成された沖積平野で、山陰地方では随一の規模を誇ります。

日本海に面する島根半島の北及び西岸は、リアス式海岸が展開しており、特徴的な地形と景観が見られ、いくつかの入り江が形成されています。このうち日御碕を中心とした西岸域は大山隠岐国立公園に指定されています。

南の中国山地は比較的なだらかな山地であり、雲南市等の境界付近では高いところで500～600mの稜線が形づくられています。その谷間に斐伊川、神戸川とその支流が流れ、下流の平野部へ注ぎます。斐伊川の下流部は全国でもまれな天井川としての地形と景観を呈し、神戸川中流部には国の名勝・天然記念物及び県立自然公園の立久恵峡があります。

このように出雲市は、海、山、平野、川、湖と多彩な地形を有します。全体的に捉えると、北から島根半島の北山山系、平野と湖沼、中国山地と連なり、山陰地方随一の規模を誇る出雲平野は南北の山地に挟まれる形となっています。加えて、島根半島は、東西に長く、かつ、日本海に突き出した特徴的な地形であり、沖では対馬海流やリマン海流が行き交うことから、古来より大陸・朝鮮半島との交流を支える基盤(条件)でもありました。

こうした地形の中には日本海形成期の特徴的な地質を見ることができ、小伊津町の砂泥互層(タービダイト層※1)、日御碕の流紋岩柱状節理(特に経島※2)などを挙げるができます。

また、『出雲国風土記』ゆかりの地として、出雲市域には島根半島(西部)や菌の長浜、かんなびやま※3(大船山、仏経山)があり、周辺には佐比売山(三瓶山:大田市)や火神岳(大山:大山町ほか)、かんなびやま(朝日山、茶臼山:松江市)があります。

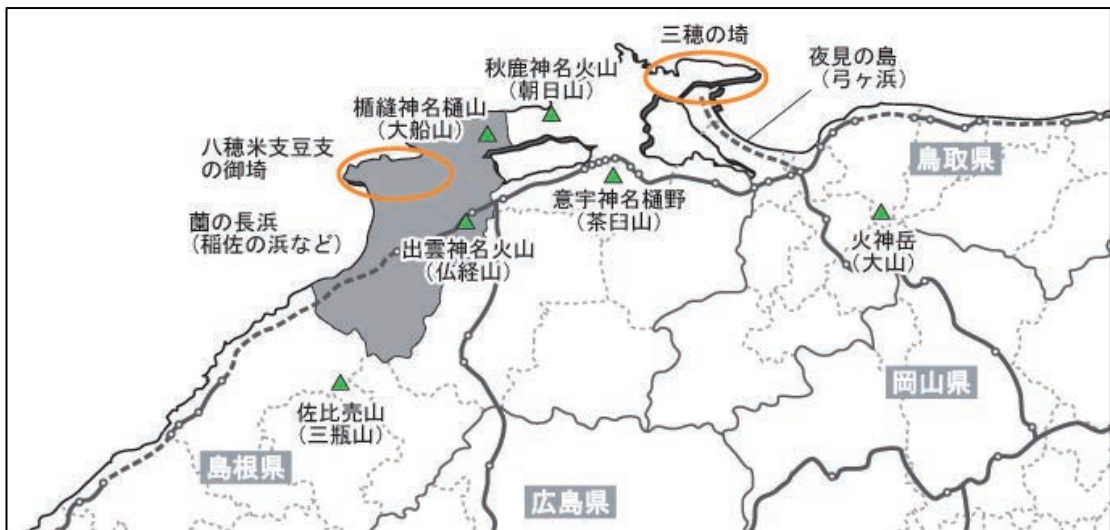


図 1-3 出雲国風土記の代表的なゆかりの地

※1 タービダイト層

層になったシマ状の地層。小伊津町のは砂岩層(灰色)と泥岩層(黒色)が交互に積み重なった砂泥互層で、日本海拡大期に海底で形成されたものです。道路の近くに大規模に露頭しているため景観的にも迫力があり、他にはあまり例を見ない典型的なものであることから、地学学習や地域学習の教材的価値も高いものです。

※2 経島

柱状節理の様子が、経巻(経文を書いた巻物)を積み重ねたように見えることから、この名前がつけられました。ウミネコの繁殖地として有名で、国の天然記念物に指定されています。

※3 かんなびやま

「かんなび」とは、「神の隠れこもれる」という意味です。「かんなびやま」は信仰の対象として古代人に祭られていた山のことを指します。『出雲国風土記』では「神名火山」、「神名備野」、「神名樋」と表記され、意宇郡、秋鹿郡、榎縫郡、出雲郡の4カ所にあったとされます。これらはいずれも「入海(宍道湖)」を取り巻くようにそびえています。

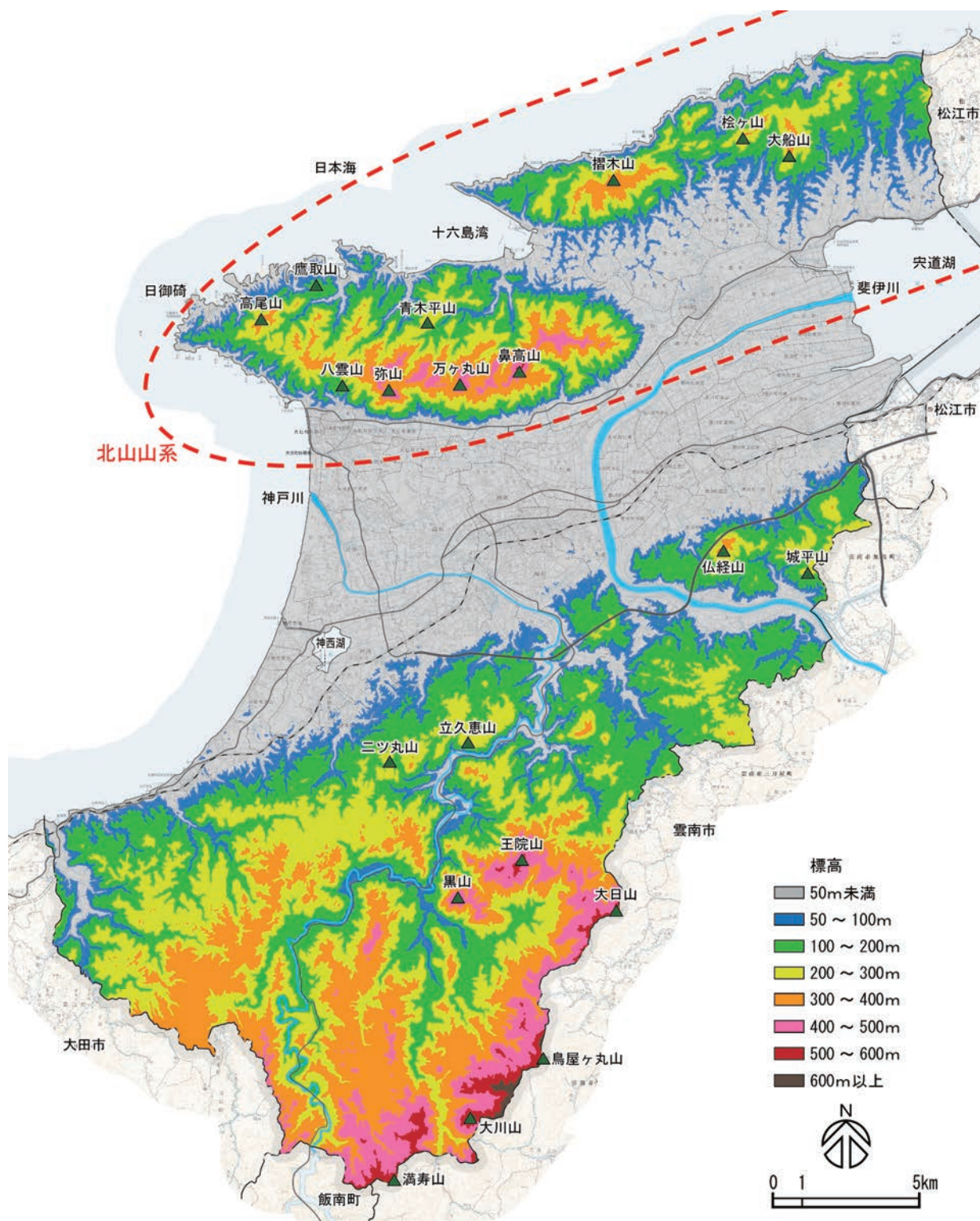


図1-4 出雲市の地形

(2) 動植物

出雲市の北部に位置する島根半島一帯や、南部の山地などには、二次林を中心に多様な植生が存在し、植生と相まって多様な動物の生息地となっています。一方では、シカやイノシシ等の鳥獣被害も顕在化しています。

植生としては、アカマツやコナラの二次林が主体であり、社寺林など一部にスダジイなどの自然植生がみられます。また、スギやヒノキの植林地も多く、大社海岸や長浜海岸、浜山などには、先人が植栽したクロマツ林も残っています。

水辺の自然環境としては、斐伊川、神戸川を骨格として、^{しんないとうがわ}新内藤川、^{ひらたふながわ}平田船川、^{あかがわ}赤川、^{じっけんがわ}十間川等の中小河川が流れ、東には宍道湖、西には神西湖^{よう}を擁し、貴重な動植物などが生息・生育する水辺の環境を備えています。特に宍道湖は^{なかうみ}中海とともに平成17年(2005)11月に、湿地の保全と賢明な利用を進めることを目的としたラムサール条約登録湿地になっています。宍道湖西岸にあたる斐伊川河口一帯は、天然記念物のマガン・ヒシクイなどのガン類、コハクチョウなどの集団越冬地であり、西日本最大の野鳥の宝庫として知られています。宍道湖西岸には、野鳥観察などを目的とした宍道湖グリーンパークもあります。

また、宍道湖には、わが国では初めて発見され命名されたシンジコハゼと呼ばれる小型の珍しいハゼが生息するほか、斐伊川の源流から中流部にかけては国指定特別天然記念物のオオサンショウウオが生息しています。加えて、宍道湖や神西湖、神戸川河口部にはヤマトシジミが生息しており、シジミ漁が盛んに行われています。

この他、島根半島北部の^{いのめ}猪目や^{きぎうら}鷺浦、出雲市南部の神戸川、出雲市西部の^{たぎ}田儀や^{おだ}小田などには、自然度の高い清澄な河川に生息し河川の指標動物にもなっているカジカガエルが生息しています。中でも、島根半島に生息するカジカガエルは、標高の低い海岸の近くに生息していることで注目されています。

植物では、佐田町^{たんべ}反辺が島根県の固有種であるイズモコバイモの発見地として知られているほか、立久恵峡一帯は固有種のオオメノマンネングサのほか、オッタチカンギクやイワギリソウ、イブキジャコウソウなどが生育しており、植物の宝庫として知られています。

天然記念物では、経島のウミネコ繁殖地、日御碕の大ソテツが国指定天然記念物に、立久恵は国指定の名勝・天然記念物に指定されています。また、日御碕の^{おうごんもうそうぐんらく}黄金孟宗群落などは県の天然記念物に、立久恵峡特殊植物群落やコマチダケの^{そうせい}叢生(大社町)などは市の天然記念物となっています。自然公園では、宍道湖、北山山系の^{いちばたやくし}一畑薬師や^{がくせんじ}鰐淵寺一帯及び立久恵峡が、県立自然公園に指定されています。

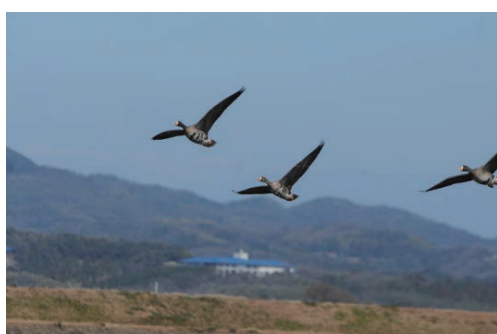
さらに、県立出雲高等学校には、前身の島根県女子師範学校で博物学(特に植物学)を教えていた^{ひらたこまたろう}平田駒太郎教諭が整備し、大正8年(1919)に「平田植物園」と命名された植物園^{きゅうちやうえん}(久徴園)が今も引き継がれており、全国に誇れる学校植物園となっています。



経島のウミネコ



コマチダケの叢生



マガン (佐藤仁志氏提供)



イズモコバイモ (佐藤仁志氏提供)

(3) 気候

出雲市の気候は、日本海側気候であり、冬は曇りや雨、雪の日が多くなっています。ただし、平野部での積雪はそれほど多くはありませんが、北西の季節風が強く、その対策として築地松や防風林がつけられてきました。

年間平均気温は14.6℃であり、月平均気温は1月が最低の4.6℃、8月が最高の26.2℃です。また、8月の最高気温の平均は31.1℃となっています。

年間平均降水量は1,685.2mmであり、7月、6月及び9月の降水量が相対的に多くなっています。また、月の日照時間は、冬期(12月～2月)には100時間を割り込み、一方で5月、8月は200時間を超えています。

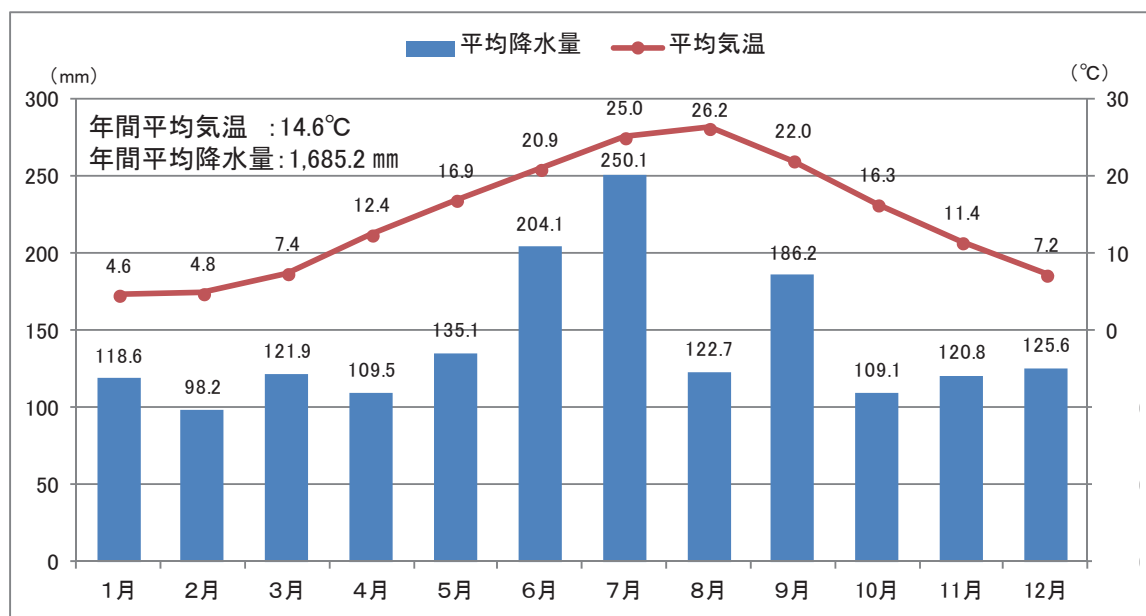


図 1-5 出雲市の気候 (平均 : 1981～2010 年)

資料 : 気象庁

表 1-1 出雲市の気候

要素	降水量 (mm)	平均気温 (°C)	日最高気温 (°C)	日最低気温 (°C)	平均風速 (m/s)	日照時間 (時間)
統計期間	1981～2010	1981～2010	1981～2010	1981～2010	1981～2010	1987～2010
資料年数	30	30	30	30	30	24
1月	118.6	4.6	8.1	1.0	2.7	55.7
2月	98.2	4.8	8.9	0.6	2.6	79.8
3月	121.9	7.4	12.2	2.3	2.5	134.3
4月	109.5	12.4	17.9	6.4	2.4	183.9
5月	135.1	16.9	22.2	11.3	2.2	206.0
6月	204.1	20.9	25.7	16.4	2.1	162.2
7月	250.1	25.0	29.1	21.3	2.1	177.4
8月	122.7	26.2	31.1	22.0	1.9	211.4
9月	186.2	22.0	26.8	17.8	1.9	150.8
10月	109.1	16.3	21.7	11.2	1.8	158.5
11月	120.8	11.4	16.2	6.6	2.0	107.7
12月	125.6	7.2	11.1	3.1	2.5	72.9
年	1,685.2	14.6	19.2	10.0	2.2	1,693.2

資料 : 気象庁

(4) 景観

出雲平野は、山陰地方随一の広さを有する穀倉地帯であり、そこには散居集落が広がっています。多くの家には築地松と呼ばれる屋敷林があり、北・西面を中心にクロマツを中心とした高木で囲まれています。この築地松が散在する景観は、出雲地方独特のものであり、10数mものクロマツが「陰手刈」という伝統的な職人技で美しく刈り込まれています。この築地松に囲まれた屋敷は、春には水の張られた水田に浮かび、夏には緑の絨毯の中に、秋には黄金色の稲穂に包まれ、冬には北西の季節風が吹きすさぶ雪景色にたたずみ、四季を通じて様々に表情を変える景観を見せてくれます。こうした景観を全体的に眺望する地点として、出雲平野の両側に位置する北山山系及び中国山地にいくつかのビューポイントがあり、特に前者に位置する旅伏山からは、眼下に広がる散居集落を見渡すことができます。また、数は少なくなりましたが、出雲地方独特の「反り棟」を有する茅葺き民家が残っています。

散居集落は、富山県の砺波平野や、宮城県の仙台平野、岩手県の胆沢平野などにもあり、家の周りに屋敷林がありますが、きれいに刈り込まれた築地松のような屋敷林はなく、築地松に囲まれた散居集落景観は、世界でも出雲平野にしか見られない大変貴重なものです。

出雲平野の北西側の大社地域には出雲大社があり、国宝の本殿や重要文化財の楼門をはじめとした建造物群と社叢などによって、幽玄な景観を形づくっています。その南には、神門通りを中心に門前町が形成され、重要文化財の旧大社駅本屋、登録有形文化財の出雲大社宇迦橋大鳥居、一畑電鉄出雲大社前駅舎などが、歴史的なたたずまいを印象づけています。門前町は出雲大社の東側にかつて千家・北島国造家に仕えた神職らの屋敷が並んでいる社家通りがあるほか、出雲大社の西側にも広がり、神迎の道やお宮通りに伝統的な町家が建ち並ぶ景観が残っています。また、門前町の西側には稲佐の浜が広がり、奉納山公園展望台からは、稲佐の浜を含め菌の長浜を俯瞰でき、遠くには『出雲国風土記』（国引き神話）で佐比売山と記されている三瓶山を望むことができます。



出雲平野の散居集落（旅伏山から・佐藤仁志氏提供）



稲佐の浜（菌の長浜）



神門通り



旧大社駅本屋（重要文化財）

一方、出雲平野の北東側の平田地域には、江戸末期から明治初期にかけて木綿の集散地として栄えた名残を今に伝える「木綿街道」が位置し、宍道湖につながる平田船川周辺には、造り酒屋や醤油醸造元などの商家、町家の建物が残っており、路地的な空間と合わせて下町情緒を感じる町並みを残しています。

出雲平野の北に横たわる島根半島はリアス式海岸となっており、特徴的な風景が見られるとともに、変化に富む地形と相まって、入り江の浦には漁村や港町などの集落が独特の景観を形づくっています。また、冬には十六島^{うっぷるい}のり（標準和名：ウップルイノリ）の摘み取りが行われるなど、伝統的な生業・生活文化、風物詩としての景観も息づいています。

出雲平野の東側の宍道湖、西側の神西湖では、シジミ漁などが行われ、その文化的な景観が風物詩となっています。また、宍道湖西岸及び斐伊川河口一帯は、生息する動植物とともに特徴的な自然景観を形づくっています。一方、神西湖は景勝地としても知られ、江戸時代後期には「神西湖九景」が京都の絵師によって描かれました。

島根半島の西端部周辺には、朱色が映える重要文化財の日御碕神社や、登録文化財の出雲日御碕灯台、ウミネコの繁殖地として国の天然記念物に指定されている経島などがあります。これらは大山隠岐国立公園に指定されている日本有数の景観の一つです。

その山地部にある国の指定史跡鱒淵寺境内の一帯、神戸川中流域の国の名勝・天然記念物である立久恵の一帯などは、優れた自然環境を有し、かつ、景勝地でもあり、県立自然公園に指定されています。

出雲市西部の日本海沿岸は、島根半島とは対照的な砂浜が続きます。日本海から吹き付ける強い季節風と飛砂防止のために植林された松が連なり、白砂青松の海辺の景観を見ることができます。

この他、出雲市南東部の稗原^{ひえぼら}では、広範囲に多くの棚田が営まれており、平野の水田とは趣を異にする独特の風景が広がっています。

さらに、佐田^{さだ}地域など神戸川の中流域や斐伊川流域に広がる田畑、集落などの文化的景観と河川と山々が織りなす自然景観は、人々のくらしや地域の歴史文化を伝えています。



「木綿街道」



小伊津



立久恵峡（佐藤仁志氏提供）



佐田地域の景観

3 社会条件

(1) 人口・世帯

出雲市の近年の人口の推移を国勢調査からみると、平成12年(2000)以降、減少・停滞傾向にあり、平成17年(2005)から平成27年(2015)の10年間では約1,800人の減少となっています。

平成22年(2010)から平成27年(2015)は、市全体で微増となっていますが、出雲地域、斐川地域を除く5つの地域(平田、佐田、多伎、湖陵、大社)で減少傾向が続いています。

世帯数(国勢調査)についても、市全体及び出雲地域、斐川地域では増加傾向にありますが、他の5つの地域(平田、佐田、多伎、湖陵、大社)では減少又は停滞傾向にあります。

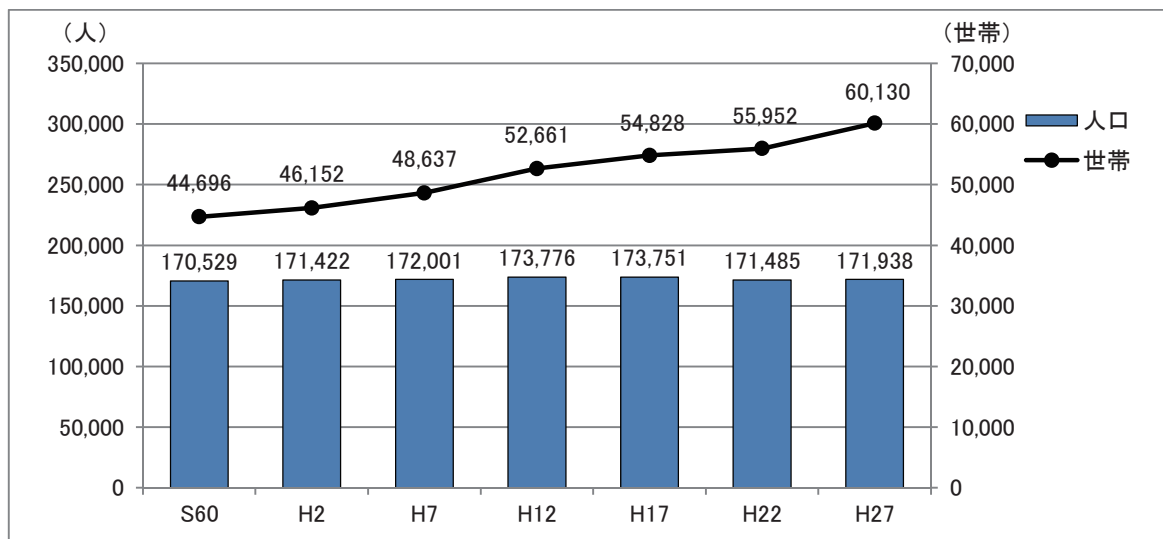
世帯人数については、市全体及び各地域とも減少傾向が続いており、市全体で1世帯当たり3人を割り込んでいます。

島根県についてみると、人口と世帯人数は減少傾向、世帯数は増加傾向にあります。

表 1-2 出雲市及び各地域の人口・世帯の推移 (人・世帯)

地域名	H17			H22			H27			増減数(H22-H27)		
	人口	世帯	世帯人数	人口	世帯	世帯人数	人口	世帯	世帯人数	人口	世帯	
出雲市	173,751	54,828	3.17	171,485	55,952	3.06	171,938	60,130	2.86	453	4,178	
内訳(地域)	出雲	88,805	30,200	2.94	89,020	30,973	2.87	92,074	34,638	2.66	3,054	3,665
	平田	28,071	7,909	3.55	26,908	7,858	3.42	25,294	7,794	3.25	-1,614	-64
	佐田	4,213	1,169	3.60	3,816	1,146	3.33	3,406	1,075	3.17	-410	-71
	多伎	3,905	1,276	3.06	3,767	1,253	3.01	3,543	1,232	2.88	-224	-21
	湖陵	5,732	1,758	3.26	5,369	1,727	3.11	5,270	1,748	3.01	-99	21
	大社	15,581	4,799	3.25	14,916	4,767	3.13	14,342	4,795	2.99	-574	28
	斐川	27,444	7,717	3.56	27,689	8,228	3.37	28,009	8,848	3.17	320	620
島根県	742,223	260,864	2.85	717,397	262,219	2.74	694,352	265,008	2.62	-23,045	2,789	

資料：総務省統計局「国勢調査結果」



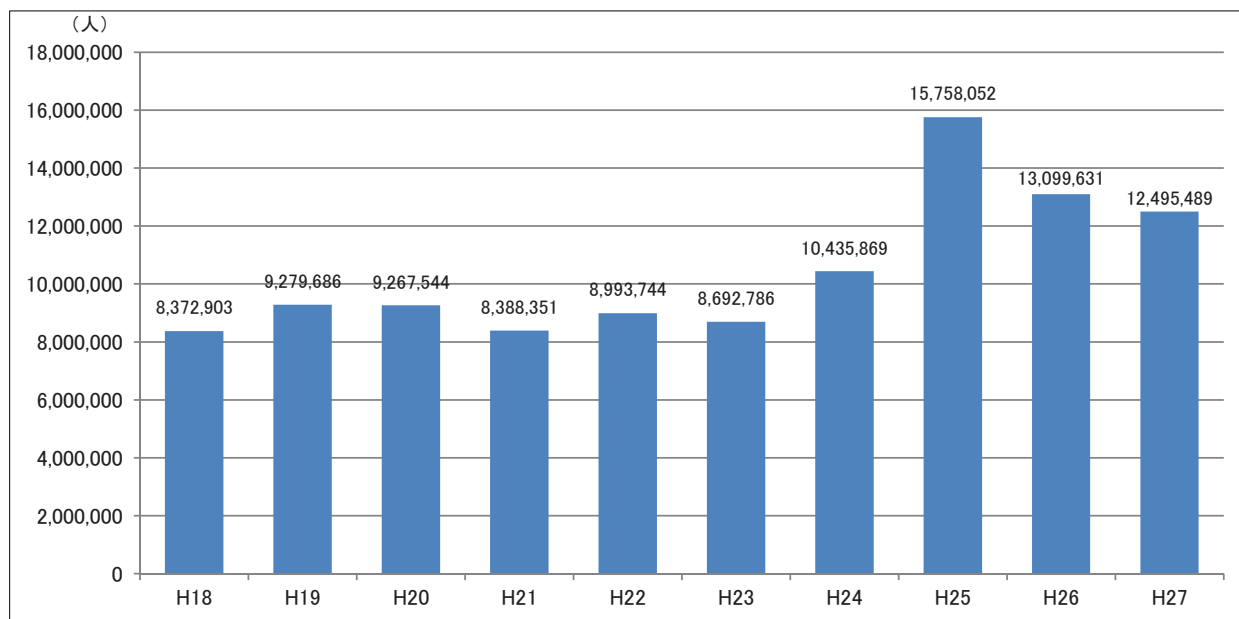
資料：総務省統計局「国勢調査結果」

図 1-6 出雲市の人口・世帯数の推移

(2) 入込観光客数

出雲市の入込観光客数は、平成27年(2015)において約1,250万人となっています。平成25年(2013)には出雲大社の「平成の大遷宮^{せんぐう}」があったことから、1,600万人近くまで増加しましたが、その後減少に転じています。

また、観光地点別で入込観光客数(平成27年)をみると、およそ半数は出雲大社となり、これ以外では日御碕、島根ワイナリー、道の駅キララ多伎、道の駅湯の川、一畑薬師、立久恵峡が上位となっています。



資料：島根県観光動態調査

図1-7 出雲市の入込観光客数の推移

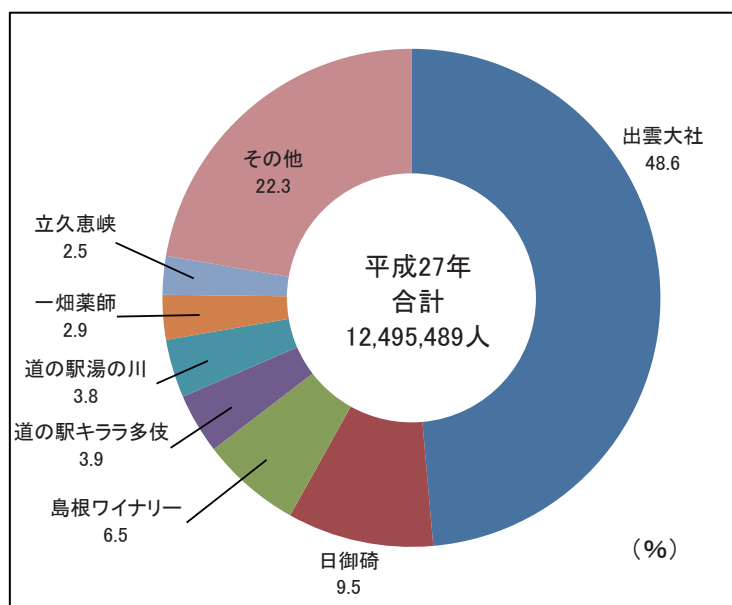


図1-8 出雲市の観光地点別入込観光客数(平成27年)

表1-3 文化財に関連する主な観光地点別内訳

名称	入込客	
	延べ数	割合
出雲大社	6,076,000	48.6%
日御碕	1,183,095	9.5%
一畑薬師	362,000	2.9%
立久恵峡	318,304	2.5%
須佐神社	147,300	1.2%
長浜神社	74,826	0.6%
吉兆館	51,453	0.4%
万九千神社	49,610	0.4%
荒神谷遺跡	47,883	0.4%
平田本陣記念館	15,473	0.1%
原鹿の旧豪農屋敷	8,963	0.1%
鱒淵寺	8,423	0.1%

資料：島根県観光動態調査(平成27年)

4 出雲市の歴史

(1) 歴史概要

平成17年(2005)の合併によって新たな枠組みとなった今の出雲市においては、現在に至るまでの通史を調査研究に基づいて総括的にまとめた“出雲市史”はまだ作成されていません。しかし、本構想を策定するにあたり、当市の歴史を概観する必要が生じたため、以下の通り時代ごとに歴史概要を示します。なお、当市の正式な通史については、今後、調査研究を進めて、検証を重ねながら作成していくことが望まれます。

【旧石器時代】

島根県内の旧石器時代の遺跡は少なく、以前は出雲市内では確認されていませんでした。このような状況の中、平成21年(2009)に多伎町内で砂原遺跡学術調査団が発掘調査を行い、出土した石器が11万～12万年前の「国内最古」のものとして報告されています。

一方で、各学会や専門家の中には出土した石器について、その認定を巡り慎重な評価を強調する向きも見られます。今後は、学術的な論議を見守り遺跡の評価付けを進めていくこととなります。

【縄文時代】

縄文時代は出雲平野の大部分を古宍道湾が占めている期間が長く、人々が生活を営める場は山麓などに限られていました。そのため現在発見されている市内の縄文時代の遺跡は、あまり多くありません。

出雲平野では古い段階である早期末の遺跡として、平野西部の砂丘上にある上長浜貝塚^{かみながはま}や北山山麓に位置する菱根遺跡^{ひしね}、山持遺跡^{さんもち}が挙げられます。続く前期末から中期までの遺跡は、斐川町の上ヶ谷遺跡^{あげだに}や神戸川左岸の三田谷Ⅲ遺跡^{さんただに}が確認されているだけです。後晩期は海退が進み三瓶山の噴火に伴う河川の沖積作用による平野形成が始まることから、平野中央部でも矢野遺跡や蔵小路西遺跡^{くらしょうじにし}が認められるようになるほか、山裾で三田谷Ⅰ遺跡、出雲大社境内遺跡、後谷遺跡が、神門水海の南で御領田遺跡^{ごりょうでん}などが展開します。

これらの遺跡は、いずれも当時は水域が傍まで迫った場所に位置しており、漁労を行う上では適地であったと考えられます。

【弥生時代】

縄文時代には狩猟採集を主とした食糧調達、弥生時代に入り稲作を中心に行われるようになると、広大な土地と水が豊富な出雲平野に多くのムラが営まれるようになります。そしてこれらのムラは、中期から後期にかけて一つにまとまりクニへと発展していきます。

平野への人の進出 沖積地化による平野の形成が始まったばかりの縄文時代後期から弥生時代前期にかけては土地が安定しておらず、出雲平野にはあまり多くの人々は暮らせなかったようで、矢野遺跡のほかに目立った集落は認められません。平野に本格的に人が進出し多くのムラが出現するのは、人が住める環境が整った弥生時代中期になってからです。

ムラからクニへ 多くのムラが併存するようになった広大な出雲平野には、その生産力を背景に大きな勢力をもつ集団も出現したようです。その証として大量の青銅器が出土した荒神谷遺跡が挙げられます。ここで見つかった358本の銅剣は、発見当時に日本中で出土していた銅剣の総数を上回っており、弥生時代中期のこの地に大きな勢力があったことを裏付けています。

そして弥生時代後期には、西谷墳墓群に大型の四隅突出型墳丘墓が次々と築かれます。これらは墓の規模や豪華な副葬品からまさに「王墓」と呼べるものです。この時期に「出雲王」が出現し、出雲平野の多くのムラをクニとしてまとめたと考えられます。

他地域との交流 西谷墳墓群の2号墓や3号墓では、大陸からもたらされたガラス製品や水銀朱のほか、吉備や北陸の特徴を持つ多量の土器が出土しています。また、猪目洞窟遺跡では弥生時代後期に埋葬された人骨の腕の部分に、ゴホウラ製の貝輪がはめられています。これらの例から、弥生時代は他地域との交流が活発に行われたことが分かります。

【古墳時代】

古墳時代は、現在の松江市から安来市にかけての出雲東部と、出雲市を中心とする出雲西部でそれぞれ大きな勢力が出現する時代です。

出雲東部では前期以降、前方後方墳や方墳を主とした古墳が継続的に築かれるのに対して、出雲西部では前期から中期までの古墳が少なく、後期になってからその数が一気に増え、墳形も前方後円墳や円墳を主とするという特徴があります。これら二つの勢力を象徴する後期の古墳が、前方後方墳の山代二子塚古墳(松江市)と前方後円墳の今市大念寺古墳(出雲市)です。墳丘規模もほぼ同じであることから、これらは拮抗した勢力で出雲を二分する東西両雄の墓と考えられています。

中期古墳の分布 出雲西部では前期の古墳はあまりなく単発的な出現にとどまりますが、中期になると数が少し増え、密に分布する地域が認められるようになります。この時期に、斐川町荘原では神庭岩船山古墳や軍原古墳などの、神西湖(神門水海)周辺では北光寺古墳や間谷東古墳などのまとまりが見られ、これらはいずれも陸運や水運という交通の要衝を押えた当時の勢力分布を反映していると思われます。

社会構造を示す古墳群 上塩冶築山古墳の周辺ではこの首長墓を取り巻く円墳群が発見されました。これまでは単独で築かれたと考えられていた上塩冶築山古墳が、実は小規模な円墳群に取り巻かれ、さらにその外側を上塩冶横穴墓群が取り囲んでいる様相が明らかになりました。首長墓を頂点にした円墳群と横穴墓群の配置構成で示されるヒエラルキーは、当時の社会構造を如実に反映するものとして注目されます。

垣間見えた精神世界 未盗掘古墳である国富中村古墳の石室内では多数の出土品が見つかったほか、埋葬が終了してから何年か経過した後に石棺や副葬品が破壊されていることが分かりました。坏や甕などの土器には飲食物が供えられていたと考えられることから、『古事記』に記された「ヨモツヘグイ」の思想を彷彿とさせる儀礼が行われていたと思われます。また、石棺や副葬品の破壊は被葬者のよみがえりを防ぐための再生阻止儀礼であることが明らかとなりました。これまでは後世の墓荒しの仕業と考えられていた石室内の破壊の痕跡について、再考を迫る大きな発見となりました。当時の人々の精神世界や死生観が垣間見られる数少ない貴重な事例です。

【奈良・平安時代】

出雲には、奈良時代に編纂された『古事記』や『日本書紀』、『出雲国風土記』に記載されている伝承地や登場地が今でも数多くあり、当時の情景をうかがい知ることができます。

また、平安時代末期に編まれた歌謡集『梁塵秘抄』などの書物を紐解くと、出雲が全国的に知れ渡った聖地であったことがうかがえます。

風土記からたどる出雲市 『出雲国風土記』はほぼ完全な状態の写本が残る唯一の風土記であることから、他地域との比較において出雲の魅力を一層際立たせる貴重なものです。

『出雲国風土記』には郷里編成や地名の由来などが詳細に記されており、現在の出雲市は「出雲郡」、「神門郡」、「楯縫郡」などとして登場します。これらの条文中に記述された山野や川などの自然の名称、地名、神社の多くは、今に受け継がれています。

また、古志本郷遺跡から見つかった大型建物跡は、神門郡家の郡庁院と推定されており、

後谷遺跡で発見された礎石建物は出雲郡家の^{しょうそう}正倉と考えられているほか、天神遺跡や青木遺跡などからも官衙施設関連の遺構や遺物が発見されています。

さらに、近年の発掘調査で見つかった杉沢遺跡の道路遺構は、『出雲国風土記』で^{まにしのみち}「正西道」と記載される古代山陰道と考えられており、推定ルート付近には「朝山郷新造院」に比定される神門寺境内廃寺や、火葬骨など仏教に関連する遺物が見つかった築山遺跡があります。これらの遺跡は奈良時代に、古代山陰道を経由して仏教をはじめとする様々な文化が伝わったことを物語っています。

広く知られていた出雲 平安時代の特筆すべき文化財としては、^{おおてらやくし}大寺薬師の仏像群、鰐淵寺の仏像や神像が挙げられます。大寺薬師には10世紀頃の薬師如来坐像のほか9世紀頃の中央の仏師の作と考えられる四天王立像があります。これら仏像群を納めていた大伽藍は慶安3年(1650)の大洪水と山崩れで壊滅したとされ、その後、住民たちによって救い出され今に守り伝えられた仏像群は、かつて重要な仏教施設がこの地に存在していたことを伝えています。

鰐淵寺に残る銅造観音菩薩立像は金銅仏の貴重な基準作としてよく知られているほか、「出雲国」と書かれた最古の金石文が記されています。また、^{ごず}牛頭天王像や木造神像群は、平安時代の鰐淵寺における信仰形態や神仏習合のあり方を推定するうえでの貴重な彫刻群です。

また、10世紀の貴族の子供向け教養書にあたる『^{くちずきみ}口遊』には^{うんた わに きょうきん}「雲太・和二・京三」の記述がみられます。順に出雲大社本殿、東大寺大仏殿、平安京大極殿を示し、当時、出雲大社の本殿が巨大建造物として広く認知されていたことが分かります。さらに『^{らんじ}梁塵秘抄』では日御碕や鰐淵が^{ひじり すみか}「聖の住所」として記載されており、この地が仏教者たちの有名な修行の場であったことが分かります。

このように、北山周辺は出雲大社、鰐淵寺、大寺薬師など信仰に関する文化遺産が集中する地域で、古くから全国的に知られていました。

【中世】

中世は、荘園・公領制が出雲にも浸透し新たな社会構成が成立する時代です。また、出雲大社(杵築大社)と鰐淵寺が強く結びついて隆盛を極めるとともに、武将の覇権争いと絡み合って中央の情勢がこの地にも持ち込まれ、大きな影響を与える動乱の時期でもあります。

海運の発展と市場の成立 鎌倉初期ごろまでには全ての地域や住民がいずれかの荘園や公領に属することとなりました。この中世社会の成立に伴い、各地から直接都に住む荘園領主のもとに年貢として大量の諸物資を輸送する必要が生じました。あわせて、生産力の増大に伴って日本海岸部での交易や、中海・宍道湖舟運の物資輸送も盛んになってきました。このため、古代律令制のもとでは輸送がもっぱら山陰道などの陸上交通によっていたものが、中世になると安価で合理的な海上交通へと移行しました。そして、この日本海における水運の成立を契機に、^{きづき うりゆう}杵築、宇龍、平田、大津、田儀などが港(津)として発展します。水上交通を中心とするこうした交通網の整備・拡大が陸上交通とも緊密に結びつき、杵築、平田、^{えんや いまいち}塩冶、今市などでは市場が開かれるようになります。

出雲大社と鰐淵寺 中世は出雲平野の荒地が大々的に開拓される時期です。開拓がうまくいくとその土地の一部は出雲大社や鰐淵寺に寄進されたことから、両者は領地を拡大しました。また、社会全体が仏教的性格をおびた中世において、出雲大社と鰐淵寺は神仏習合によって車の両輪のように一体となり、出雲の信仰の中心的存在として機能しました。

両者は明確に区別されながらも、出雲大社の主要な年中行事に鰐淵寺僧が参画するなど補完的に協力することで、国一宮としての機能を果たしました。このような事例は全国的に稀で注目されています。

また、インドの^{りょうじゅせん}霊鷲山が欠けて海に漂っていた浮浪山をスサノヲが杵で突き固めたという中世の国引き神話は、出雲大社と鰐淵寺共有の縁起として成立したもので、神仏習合の世界観を端的に表す興味深いものです。

盛隆を示す物証 出雲大社では平成12年(2000)の発掘調査でスギの大木を3本束ねて1本の柱とした巨大な柱が見つかりました。これは鎌倉時代の本殿のものと考えられ、古い絵図で示されていた通り、当時は巨大神殿であったことが明らかになりました。

一方、鰐淵寺境内では、近年の調査によって僧坊(僧の住まいなど)のあった可能性がある平坦面が90ヵ所確認されました。山間の狭い土地に堂宇と僧坊が建ち並び、多くの僧侶が行き来する往時の鰐淵寺の様子が浮かびあがってきました。

出雲の武将 南北朝期の動乱に翻弄された出雲の武将として、塩冶郷を拠点とした出雲隠岐守護の^{えんやたかさだ}塩冶高貞(?-1341)が挙げられます。高貞は後醍醐天皇(在位1318-39)や足利尊氏(1305-58)に従い多くの戦果をあげ、歴史の転換期に重要な役割を果たしました。その後、高貞の活躍は南北朝期の軍事物語『太平記』で語られることとなります。

戦国時代の情勢 戦国時代に入ると出雲では尼子氏が勢力を拡大します。尼子経久(1458-1541)は鰐淵寺の運営に介入したほか、出雲大社の境内に三重塔、鐘楼などの仏教施設を次々に建てて神仏習合の景観を創出しました。このようにして経久は、寺社の権限を掌握することでその勢力を抑圧しました。

この動向は次の毛利氏時代にも継続されたことから、寺領や社領が減らされた鰐淵寺や出雲大社はその勢力を次第に弱めていくこととなります。

なおこの時期、多伎や佐田は石見との国境であることから、軍事拠点として鶴ヶ城や^{たかやぐらじょう}高櫓城など多くの山城が築かれていきます。

【近世】

近世に入ると、出雲・隠岐両国に封じられた大名の堀尾氏が松江に築城して城下町を建設します。その後、城下町としての松江に対して、出雲(今市・平田)は農産物などの生産やその集積・輸送を背景に町場が形成され発展していくこととなります。また、国学や洋学などの学問が出雲では独自の展開を遂げ、特に和歌では全国的にも注目される地域となります。

出雲平野の農地開拓 中世末から近世初頭に斐伊川が完全に東流するようになると、松江藩の水利政策により、河口付近では「川違え」による宍道湖の農地開拓が進められました。こうして拡大した農地を基盤に繁栄した地主の中には後に豪農へと発展する者も認められます。

一方、斐伊川の東流により平野の西部でも荒地の開拓が可能となりました。大梶七兵衛(1621-89)による荒木の開拓がよく知られていますが、^{はたきへえ}秦喜兵衛(生没年不詳・西園)、^{みきよへえ}三木与兵衛(1595-1643・遙堪付近)、^{いのうえすけ}井上恵助(1721-94・浜山)らも地域の荒地開拓に大きく貢献しました。

木綿栽培とたたら製鉄の盛行 元禄2年(1689)に松江藩が綿の栽培を奨励すると、出雲平野では18世紀に入ってから木綿栽培が盛んになります。そして、平田町、今市町、直江町、杵築町は町場として発展し木綿市が開かれるようになります。

農産物以外では、たたら製鉄による鉄生産が注目され、市内では^{たぎさくらいけ}田儀櫻井家や^{たなべけ}田部家に

よってたたら操業が盛んに行われました。特に田儀櫻井家たたら製鉄遺跡は、本宅跡や山内従事者の住居跡などが残る宮本鍛冶山内遺跡のほか、生産に関連する遺構が残る越堂たたら跡、聖谷たたら跡など、たたら操業に関連する一連の遺構群が良好に残っています。また、製品を搬出した田儀港のまちなみも当時の面影を今に伝える貴重な文化的景観です。

産物の水運 産物などの運搬には水運が利用されました。出雲地域で生産された米や木綿などの産物や雲南方面から持ち込まれた物資は、高瀬川によって杵築(荒木川方)に集荷された後に杵築浦から松江藩の船で運ばれました。また、宇龍では松江藩の鉄が積み出されました。

出雲大社と鰐淵寺の神仏分離 出雲大社は寛文の遷宮を契機に境内から仏教施設や鰐淵寺僧を一掃し、400年余りに及ぶ鰐淵寺との関係に終止符を打ちました。全国に先駆けて行われたこの神仏分離は、宗教史においても重要な出来事として位置づけられています。

その後、出雲大社は「出雲御師」と呼ばれる神職たちが全国各地に布教に赴き、多くの信者を杵築に招き入れる活動を積極的に展開しました。杵築では参詣客を対象とした富くじも行われたことから、門前町は大きく発展しました。

学問の発展 松江の学問や文化が武士を中心として発展したのに対し、出雲では神官や町人が中心となって発展したという特徴があります。

出雲はスサノオが最初に歌を詠んだ地とされることから和歌発祥の地として知られています。戦国期には千家、北島両国造家でおの歌会が開かれていたようです。この潮流が江戸時代の和歌発展につながり、出雲歌壇は花開きます。江戸の僧で歌人の明珠庵釣月(1659-1729)は、宝永年間(1704-11)に来雲し二条流和歌を広めました。江戸後期に入ると、本居宣長(1730-1801)に学んだ出雲国造家の千家俊信(1764-1831)が出雲に宣長の国学をもたらしました。俊信は幕末の出雲(大社)歌壇に鈴野屋流を導入して和歌盛隆の基礎を築き、私塾「梅廼舎」は多くの門人を育てました。その後、明治の初めころまでは、千家尊孫(1796-1873)や富永芳久(1813-80)の活躍により出雲歌壇は全国的にも注目される存在となっていきます。

その他の学問と私塾 このほか、出雲の学問の発展に貢献した人として、鳴滝塾でシーボルトから西洋医学を学んだ西山砂保(1781-1839)、上塩治村に有隣塾を開いた伊藤宜堂(1791-1874)、英語学校の包蒙館を開いた勝部其楽(1846-1933)らが挙げられます。

このように、出雲では、藩士の弟子の教育を行う松江の藩校(明教館・修道館)に対して個性ある私塾が設けられました。これらの私塾に富農富商層の子弟や神官、僧侶が相次いで入門し高い知識と教養を身につけ、幕末から近代にかけて地域の指導的役割を果たしていきました。

【近代】

近代の出雲市における主な事項としては、鉄道の開設、紡績織物工場の進出、学校の設立などが挙げられます。ことに鉄道は寺社への参拝の利便を図るために整備され、鉄道開設により出雲大社や一畑寺の参詣者は年々増え続けていくこととなります。

鉄道の開設 米子から随時西へ延びてきた山陰線は、明治43年(1910)に「出雲今市駅」まで開通します。その後、支線の大社線が開通した明治45年(1912)以降、杵築町は出雲大社への参拝客で賑わうこととなります。

また、当時、一畑講が盛んとなり一畑寺への参拝が増えてくると、平田を中心に東は松江から西は出雲大社に至る鉄道を要望する声が高まります。この路線は大正3年(1914)にまず今市-平田間が開通し、翌年今市-一畑間の全線が開通します。そして、出雲大社と

宮島を結ぶという壮大な計画のもと昭和7年(1932)には大社宮島鉄道が出雲今市―出雲須佐間で開通します。しかし、この計画は頓挫し宮島までの路線は実現せず、名称も出雲鉄道に変更され、昭和40年(1965)にはついに廃線となりました。

一方で鉄道の普及は明治20～30年代に盛んであった宍道湖における汽船定期航路が姿を消す要因にもなりました。

製糸紡績・製織工場の進出 明治26年(1893)に平田製糸合資会社の設立を端緒に、出雲市では製糸紡績・製織工場の進出が相次ぎました。明治32年(1899)ごろに平田両全(株)、大正9年(1920)に出雲製織(株)(後の大和紡績)、大正12年(1923)に郡是製糸(株)今市工場、大正14年(1925)に鐘淵紡績斐川工場が誕生し操業を始めます。これにより出雲市は山陰地方における一大工業地帯となりました。

学校の設立 明治5年(1872)に「学制」が公布されると平田の石橋孫八宅(石橋家住宅)に郷校が開校され、翌明治6年(1873)には旧郡屋(村役人の集会所)に平田一番小学が開校します。これが県内で最初の小学校の開校です。また、雨森精翁(1822-82)が明治11年(1878)に平田町に開いた漢学塾亦楽舎は、公には中学校扱いとなっており地方の教育を補いました。

高畝栽培 米の増収を図るために、出雲平野では高畝栽培による米作りが行われました。この農法は収穫後の晩秋から初冬にかけて湿田に高畝を掘りあげ、ここに裏作の緑肥として苜蓿と呼ばれるマメ科の植物を植えて栽培し、地中の窒素を造成することで米の生産性をあげるものです。出雲平野で特徴的にみられる農法ではありますが、大変な重労働を必要とするうえ、米の品質が良くないという問題も伴いました。

【現代】

出雲の歴史をたどるうえで現代は画期的な変化が多く認められる時代です。ここでは、出雲路のモータリゼーション化、平成の市町村合併、斐伊川放水路事業を取り上げます。

出雲路のモータリゼーション化 明治45年(1912)に国鉄大社線が開通して以来、大社駅の乗降客は年々増え続け、昭和26年(1951)にはピークを迎えます。しかし、昭和37年に市街地北部に新設の国道9号が開通して、昭和40年代に自動車大幅に普及すると急速に出雲路のモータリゼーション化が進みました。その結果、公共交通機関である大社線は利用者が年々減少し、平成2年(1990)にはついに廃線となりました。その後、20年あまりにわたり出雲大社の門前町は徐々に衰退していきましたが、平成21年に山陰自動車道が出雲ICまで開通すると、平成の大遷宮をきっかけに多くの参拝者が出雲大社を訪れ、門前町はかつてのにぎわいを取り戻しました。

平成の大合併 出雲市、平田市、佐田町、多伎町、湖陵町、大社町の2市4町は平成17年(2005)に合併し、平成23年(2011)には斐川町も加わり、新たな出雲市が誕生しました。この大合併は出雲平野を中心としたまさに「平成の国引き」ともいえ、出雲市は県央の中核都市としてますます大きな発展が期待されるまちとなりました。

再びつながる斐伊川と神戸川 斐伊川放水路(総延長13.1km)はこれまで地域の人々を悩まし続けた洪水を防ぐために開削されました。明治初めの構想に端を発し、昭和56年(1981)に事業着手、平成25年(2013)6月に完成したこの放水路事業は、まさに100年の大計で「平成のオロチ退治」と称されています。この放水路は、斐伊川が完全に東流し神戸川とのつながりが断たれた江戸時代以来、両河川を再び結び付けるとともに、2000年に及ぶ出雲平野の治水の歴史を私たちに伝えています。

表 1-4 出雲市に関わる主要な事項(歴史文化)

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本	
縄文 弥生		後期	出雲平野の骨格ができあがる	卑弥呼が魏に遣使	
		前期	最初のムラが出現する(原山遺跡・矢野遺跡)		
	中期	大規模な環濠集落が出現する(四絡遺跡群など) 青銅器の祭祀が行われる(荒神谷遺跡) 四隅突出型墳丘墓が築造される(青木遺跡など) 「クニ」づくりが進展する			
	後期	環濠集落が規模を拡大する(古志遺跡群) 「クニ」的なまとまりが明確になる 「王」が大型の四隅突出型墳丘墓に葬られる(西谷墳墓群) 出雲と吉備の首長が交流する(西谷3号墓など)			
	終末	出雲最大の四隅突出型墳丘墓の築造(西谷9号墓)			
古墳	239	前期	大寺1号墳などが築造される		
		中期	北光寺古墳・神庭岩船山古墳などが築造される		
		後期	出雲西部の首長墓、今市大念寺古墳が築造される 上塩冶築山古墳・上塩冶地蔵山古墳が築造される		
飛鳥	645	大化 1			大化の改新
	659	(斉明) 5	出雲国造に命じて神の宮(杵築大社)をつくらせる		藤原京に遷都 大宝令施行 平城京に遷都
	692	(持統) 6	鰐淵寺所蔵の銅造観音菩薩立像がつくられる		
	694	8			
701	大宝 1				
奈良	710	和銅 3	忌部子首が出雲国司として赴任	平安京に遷都	
	716	霊亀 2	出雲国造果安、神賀詞を奏上(国史における神賀詞奏上の初見)		
平安	733	天平 5	『出雲国風土記』が撰上される	平安京に遷都	
	794	延暦 13			
	795	14	出雲国造人長、遷都により神賀詞を奏上		
	813	弘仁 4	出雲国で俘囚の反乱が起こる		
	814	5	渤海国使王孝廉ら出雲国に到着。俘囚の反乱と渤海使への供給のため出雲国の田租が免除		
	833	天長 10	出雲国造豊持、神賀詞を奏上(国史における神賀詞奏上の最後)		
	867	貞観 9	出雲・石見・隠岐など5国に四天王像が下賜され、新羅の賊心調伏、災変消却のための転読、修法などが命じられる		
	1032	長元 5	出雲国司橘俊孝、神託と偽って杵築大社を造営しようとして佐渡国に配流		
	1067	治暦 3	杵築大社、国衙から内遙堪を寄進される。出雲国における中世的郷の初見		
	1102	康和 4	このころ、他国では神々が出雲に集まることから、10月を「神無月」と呼ぶようになったという		
鎌倉	1179	治承 3	このころ鰐淵・日御碕が撰津箕面・播磨書写山などとならぶ聖の住所として知られる	鎌倉幕府成立	
	1185	文治 1			
	1186	文治 2	頼朝の下文によって出雲孝房を杵築大社神主職に補任。源頼朝、出雲則房にかえて内蔵資忠を杵築大社総檢校職に補任する		
	1248	宝治 2	杵築大社正殿式遷宮		
	1254	6	守護佐々木泰清、鰐淵寺は国中第一の伽藍だとする		
	1271	文永 8	杵築大社三月会相撲・舞頭役結番帳、作成させる		

表 1-4 出雲市に関わる主要な事項(歴史文化)

2 / 3

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本	
鎌倉	1300	正安 2	幕府、出雲国守護佐々木貞清と国衛在宥朝山時綱・多禰頼茂の3人を杵築大社造営奉行に任命	鎌倉幕府滅亡	
	1332	正慶 1 (元弘 2)	後醍醐天皇、隠岐配流。隠岐行在所において鱒淵寺根本薬師堂を造営すると願文を立てる		
室町	1333	正慶 2 (元弘 3)	塩冶高貞ら船上山に赴き隠岐を脱出した後醍醐天皇に味方する。後醍醐天皇、王道再興の願文を杵築大社におさめ、宝剣のかわりとして神宝の剣をだすよう杵築神主に命じる	室町幕府成立	
	1336	建武 3 (延元 1)	このころまでに、出雲・石見をはじめとする中国地方の武士多数が尊氏軍の馳せ参じるという		
	1341	暦応 4 (興国 2)	足利直義、鱒淵寺北谷衆徒らに対し、佐々木高貞の誅伐を命じる		
	1344	康永 3 5	千家孝宗と北島貞孝、大社神主・国造職・所領と神事などについて和与する。杵築大社、千家・北島両国造家に分かれる		
	1355	文和 4 (正平 10)	鱒淵寺の大衆、48カ条におよぶ山内の式目を定め、連署起請する		
	1366	貞治 5 (正平 21)	倭寇鎮圧のため高麗王朝から派遣された金竜ら 17 人の使者、出雲に着岸。京都にむかう		
	1392	明德 3			南北朝の合一
	1396	応永 3	出雲守護京極高詮、杵築大社三月会の法度を定める		応仁の乱
	1467	応仁 1			
	1508	永正 5	尼子経久、京極政経から事実上の守護権を継承		
	1509	6	尼子経久、鱒淵寺に対し3カ条の掟を定める		
	1552	天文 21	尼子晴久、杵築大社に対し20カ条からなる掟を定める		
	1562	永禄 5	毛利軍、出雲今市に着陣し、出雲制圧にのりだす		
	1563	6	宇龍に北国船や唐船が着岸する		
	1566	9	尼子義久、富田城を開城し毛利氏に下る		
	1570	元亀 1	毛利氏、鱒淵寺の掟を定め、杵築大社において年3回の護摩供を行うことなどを命じる		
安土 桃山	1573	天正 1		室町幕府滅亡	
	1576	4	杵築大社造営のため、出雲一国徳政令だされる		
	1583	11	九州名護屋にむかった丹後国田辺の城主細川幽斎、宍道湖を経て杵築大社に参詣する		
	1588	16	毛利氏の奉行人、惣国の刀狩を命ぜられたが、日御碕社については一部が免除されたと伝える		
	1591	19	京都において出雲法楽の連歌が行われる 毛利氏、出雲国惣国検地にもとづき、千家・北島両国造家などに知行を打ち渡す 秀吉の朝鮮出兵計画により杵築大社領のうち 1000 石が没収され、かわりに徳政が認められる		
	1597	慶長 2	吉川広家、月山富田城に入る		
江戸	1600	5	堀尾忠氏、遠州浜松より出雲・隠岐両国 24 万石に封ぜられる	関ヶ原の戦い	
	1603	8	出雲阿国、京都ではじめて「かぶき踊り」舞い大評判となる	徳川家康、江戸に幕府を開く	
	1609	14	杵築大社仮殿遷宮		
	1616	元和 2	三木与兵衛、菱根池跡地新田に着手		
	1633	寛永 10	出雲地方終日降雨、大水でる。斐伊川土手武志村付近にて右岸決壊		
	1634	11	京極忠高、出雲・隠岐 26 万石に移封され松江藩主となる		

表1-4 出雲市に関わる主要な事項(歴史文化)

区分	西暦	年号	出雲市関係	日本	
江戸	1638	寛永 15	松平直政、信濃国松本を転じて出雲国 18 万 6000 石に封じられ、隠岐国 1 万 8000 石を預けられる		
	1667	寛文 7	杵築大社正殿遷宮		
	1676	延宝 4	大梶七兵衛、荒木の砂山の植林		
	1678	6	大梶七兵衛、高瀬川開削に着手(87 年完成)		
	1686	貞享 3	松江藩、差海川開削に着手・完成		
	1689	元禄 2	松江藩、桑・棉・楮・茶の栽培奨励		
	1717	享保 2	このころ、外国船、十六島浦にたびたび来航		
	1725	10	松江藩鉄方御法式を定め、鋤場所を 4 郡 10 ヶ所に定める		
	1732	17	雲隠石 3 国とも蝗害による大飢饉。神門郡で百姓一揆。井戸平左衛門、甘藷栽培をすすめる	享保の大飢饉	
	1744	延享 1	杵築大社正殿遷宮		
	1770	明和 7	この年までに平田・直江・今市に木綿市が設置される		
	1778	安永 7	井上恵助、浜山の植林を完成		
	1806	文化 3	伊能忠敬、石見から出雲の海岸を測量		
	1816	13	神門郡神西村・高岡村で百姓一揆		
	1832	天保 3	斐伊川に新川が開通した		
	明治	1868	明治 1		明治維新(江戸幕府滅亡) 廃藩置県
		1871	4		「学制」の発布
1872		5	平田の石橋孫八宅に郷校が開設された		
1873		6	旧郡屋に平田一番小学創設。県下の小学第一号		
1878		11	雨森精翁、私立学舎亦楽舎開校(81 年廃校)		
1881		14	島根県が現在の県域となる		
1889		22	製糸会社の平田両全株式会社設立		
1890		23	ラフカディオ=ハーン(小泉八雲)、英語教師として松江にくる		
1894		27		日清戦争(~95)	
1896		29	出雲・楯縫・神門郡を廃して簸川郡をおく		
1903		36	日御碕灯台竣工		
大正	1904	37		日露戦争(~05)	
	1912	大正 1	山陰線、出雲今市・京都間全通		
	1914	3	一畑軽便鉄道の出雲今市・雲州平田間開通		
	1920	9	出雲製織株式会社設立		
	1923	12	郡是製糸今市工場操業開始	関東大震災	
	1924	13	旧大社駅舎改築。現在の姿となる		
昭和	1925	14	鐘淵紡績簸川工場操業開始	普通選挙法公布	
	1930	昭和 5	一畑電鉄(1925 年社名変更)、川跡・大社神門間開通		
	1937	12		日中戦争開始	
	1941	16	出雲市制施行	真珠湾攻撃	
	1945	20	出雲市内が米軍機の空襲を受ける	戦争終結	
	1965	40	一畑電鉄、立久恵線廃止		
	1966	41	出雲空港開港		
	1984	59	荒神谷遺跡から銅剣 358 本発見。翌年、銅鐸 6 個と銅矛 16 本発見		
	1994	6	斐伊川放水路事業起工(2013 年工事完了)		
	平成	1990	平成 2	大社線廃止	
2005		17	出雲市・平田市・簸川郡大社町・湖陵町・多伎町・佐田町の 2 市 4 町が合併。新・出雲市となる		
2011		23	斐川町と合併	東日本大震災	

「(1) 歴史概要」の執筆にあたっては、各遺跡の発掘調査報告書ほか次の文献を参考にしました。また、「出雲市に関わる主要な事項(歴史文化)」については、松尾寿ほか 2005『島根県の歴史』山川出版社を基に作成しました。

<主な参考文献>

- 池橋達雄ほか 2004『荘原歴史物語』荘原公民館
池橋達雄ほか 2008『決定版 出雲・雲南ふるさと大百科』郷土出版社
湖陵町誌編纂委員会 2000『湖陵町誌』湖陵町
佐田町教育委員会 1976『佐田町史』佐田町教育委員会
島根県古代文化センター 2014『解説 出雲国風土記』島根県教育委員会
島根県歴史人物事典刊行委員会 1997『島根県歴史人物事典』山陰中央新報社
大社町史編集委員会 1991『大社町史 上巻』大社町
大社町史編集委員会 2008『大社町史 中巻』出雲市
大社町史編集委員会 1995『大社町史 下巻』大社町
大社まちかど百花編さん委員会 2005『大社まちかど百花』大社町
内藤正中ほか 1997『図説 島根県の歴史』河出書房新社
平田市誌編さん委員会 1994『平田市誌』復刻版 報光社
平田市大事典編集委員会 2000『平田市大事典』平田市役所
松尾寿ほか 2005『島根県の歴史』山川出版社
和田貞夫ほか 2012『図説 出雲・雲南の歴史』郷土出版社

(2) 沿革

出雲市の沿革について、現在の基礎的なコミュニティ単位(43のコミュニティセンターの配置)の構成が分かるように、沿革図により整理します。

なお、本章の第2節「3文化財の調査とその概要」では、「市内文化財の地域別聞き取り調査」の概要をまとめていますが、この調査の基礎的な単位は、コミュニティセンターのある43の地区としています。

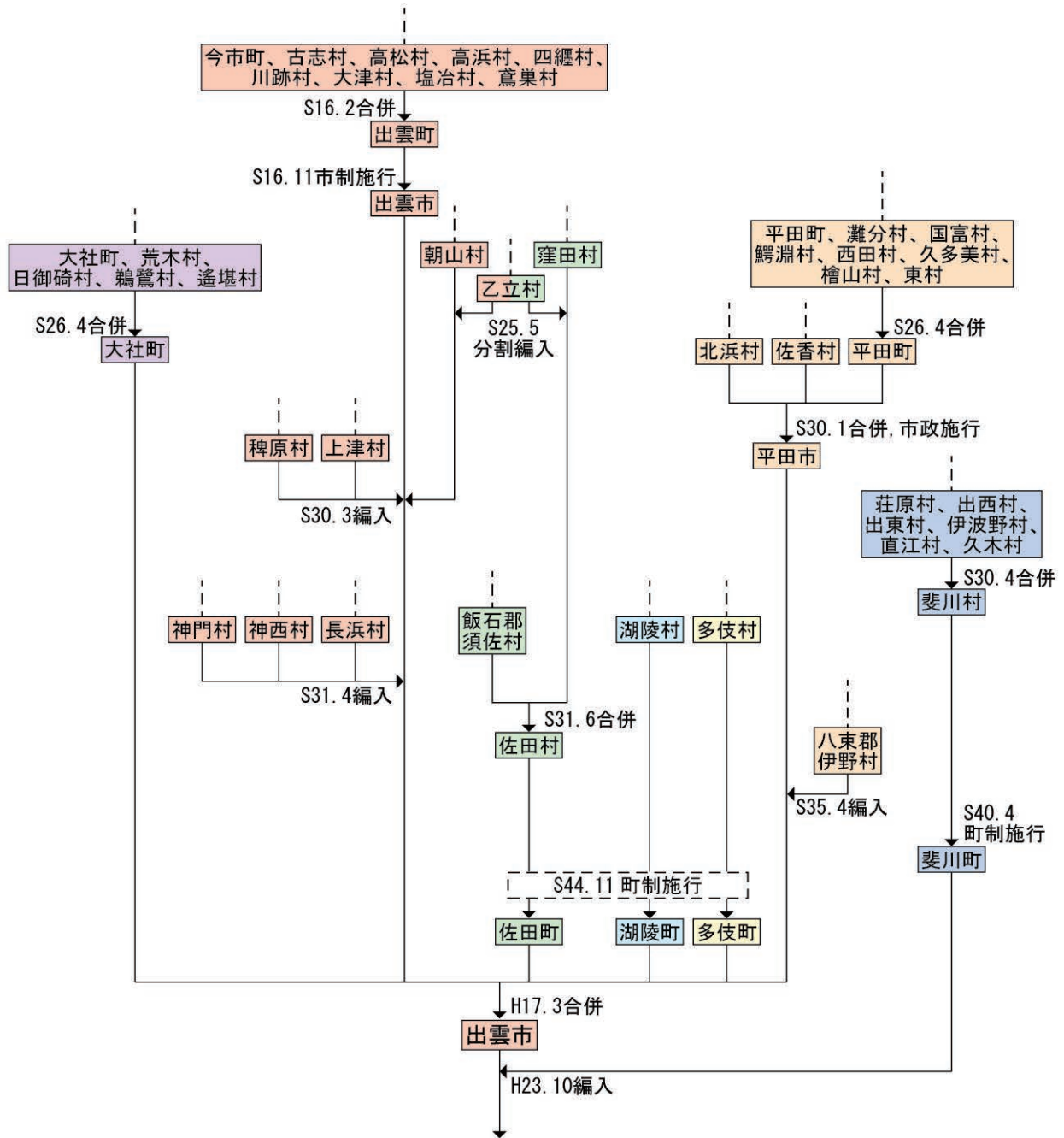


図 1-9 出雲市の沿革

出雲地域：	今市、大津、塩冶、古志、高松、四絡、高浜、川跡、鳶巣、上津、稗原、朝山、乙立、
	神門、神西、長浜
平田地域：	平田、灘分、国富、西田、鰐淵、久多美、檜山、東、北浜、佐香、伊野
佐田地域：	須佐、窪田
多伎地域：	多伎
湖陵地域：	湖陵
大社地域：	大社、荒木、遙堪、日御碕、鵜鷺
斐川地域：	莊原、出西、阿宮、伊波野、直江、久木、出東

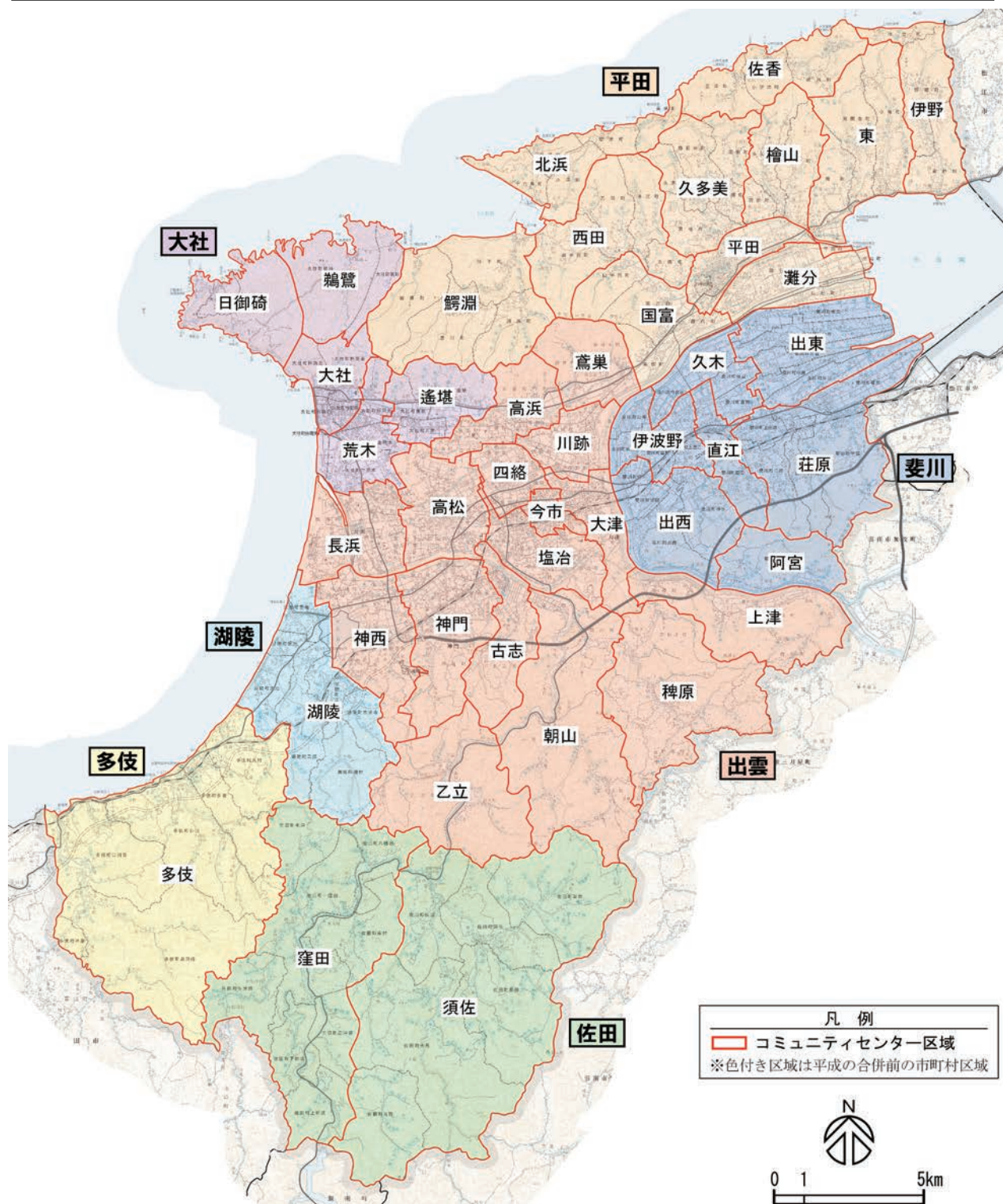


図1-10 出雲市の基礎的コミュニティ単位(43のコミュニティセンター)

第2節 出雲市の文化財の現状

1 指定文化財等の状況

出雲市には、指定文化財が全体で245件あり、国指定が47件、県指定が75件、市指定が123件となっています。

このうち国指定には、3件の国宝(出雲大社本殿、秋野鹿蒔絵手箱^{あきのしかまきえてばこ}、白糸威鎧^{しろいとどしよろい})が含まれています。

この他、登録有形文化財が15件^{*}、登録有形民俗文化財が1件、重要美術品が3件あります。

文化財の6分類のうち、有形文化財、無形文化財、民俗文化財、記念物の指定はありますが、文化的景観及び伝統的建造物群は指定されていません。また、選定保存技術もありません。

島根鳥取両県で200を超える指定文化財を有する自治体は出雲市の他、松江市と鳥取市だけです。このことから、出雲市は山陰において豊富な文化財を有する自治体と言えます。

なお、県内8市の指定文化財数は、松江市243件、浜田市91件、益田市134件、大田市118件、安来市94件、江津64件、雲南市87件となっています。

表1-5 出雲市の指定文化財等の件数(平成29年3月10日現在)

種別		国指定	(うち国宝)	県指定	市指定	計
有形文化財	建造物	4	(1)	5	4	13
	絵画	3		10	7	20
	彫刻	4		11	13	28
	工芸品	8	(2)	15	4	27
	書跡	2		4	4	10
	典籍	—		2	3	5
	古文書	7		8	10	25
	考古資料	3		2	16	21
	歴史資料	—		—	—	—
無形文化財	工芸技術	—		1	—	1
	芸能	—		—	—	—
民俗文化財	有形民俗文化財	—		2	8	10
	無形民俗文化財	1		7	24	32
記念物	史跡	12		6	14	32
	名勝	—		—	—	—
	天然記念物	2		2	16	20
	名勝及び天然記念物	1		—	—	1
計(指定文化財)		47	(3)	75	123	245
その他	登録有形文化財(建造物)					15 [*]
	登録有形民俗文化財					1
	重要美術品					3
	重要文化的景観					0
	(重要)伝統的建造物群保存地区					0
	選定保存技術					0

※ 平成29年3月10日に開催された国の文化審議会において、酒持田本店(平田町)の建造物3棟を国の登録有形文化財に登録するよう文部科学大臣に答申されました。本来は官報告示によって正式に登録されることとなりますが、本構想ではこれら3棟を登録有形文化財(建造物)として表記しています。

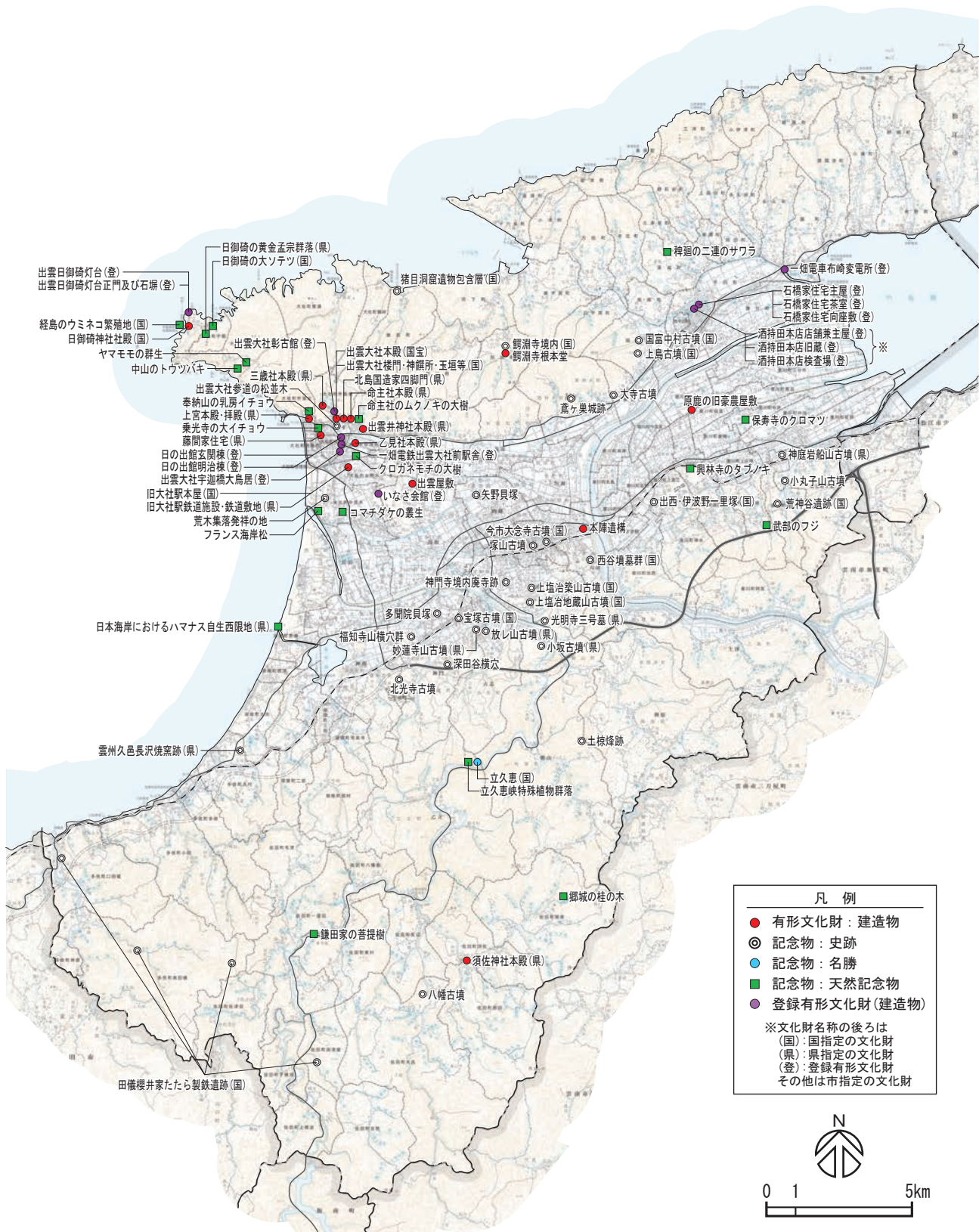


図 1-11 出雲市の指定・登録文化財の分布(土地と一体となった文化財を表示)

2 これまでの保存・活用の経緯

出雲市がこれまでに行ってきた文化財の保存・活用に関する主な事項については、次の表のとおりとなります。

表 1-6 文化財の保存・活用に関する主な事項

対象文化財	保存・活用の主な事項	時期・期間	備考
史跡猪目洞窟遺物包含層 (猪目洞窟遺跡)	史跡猪目洞窟遺物包含層出土品収蔵庫が完成	昭和 41 年(1966) 3 月	旧大社町
重文木造四天王立像ほか (大寺薬師の仏像)	大寺薬師重要文化財収蔵庫が完成	昭和 50 年(1975) 3 月	旧出雲市
史跡今市大念寺古墳	史跡今市大念寺古墳保存修理	昭和 59～62 年度(1987)	旧出雲市
史跡荒神谷遺跡	荒神谷史跡公園がオープン	平成 7 年(1995) 5 月	旧斐川町
史跡荒神谷遺跡	荒神谷博物館がオープン	平成 17 年(2005) 10 月	旧斐川町
史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡	智光院・金屋子神社保存修理	平成 18～19 年度(2007)	
国宝出雲大社本殿ほか	国宝出雲大社本殿ほか 22 棟建造物保存修理	平成 20～28 年度(2016)	
史跡西谷墳墓群	西谷墳墓群史跡公園・出雲弥生の森博物館がオープン	平成 22 年(2010) 4 月	
重文旧大社駅本屋ほか	屋根瓦乱れ直し・プラットホーム等修理	平成 22 年度(2010)	
重文日御碕神社社殿	重文日御碕神社社殿保存修理	平成 24～28 年度(2016)	
史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡	史跡田儀櫻井家たたら製鉄遺跡整備活用基本構想を策定	平成 24 年(2012) 11 月	整備活用計画を策定中
出雲大社	県指定境外社修理	平成 26～27 年度(2015)	
重文旧大社駅本屋	旧大社駅保存活用計画を策定	平成 28 年(2016) 6 月	
史跡鱒淵寺境内	出雲市史跡鱒淵寺境内保存活用計画策定委員会を設置	平成 28 年(2016) 8 月	計画策定平成 30 年 3 月予定
史跡荒神谷遺跡	出雲市荒神谷遺跡整備改修検討委員会を設置	平成 28 年度(2016)	
史跡国富中村古墳			保存活用計画策定予定
杉沢遺跡ほか			保存活用計画策定予定